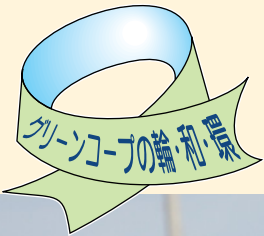




共生の時代

'10
2月

●発行:グリーンコープ共同 thể理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092 (481) 7923 FAX092 (481) 7876



相談支援事業所 こもれば舎代表
社会福祉法人 こころの樹理事長
歩みの会 代表

より むら とよ こ
寄村 仁子 さん

プロフィール

1943年大分県宇佐市生まれ。大学卒業後、教護院（現在の児童自立支援施設）に就職。3年後児童相談所に転勤、4年後退職してフリーに。1974年、歩みの会を立ち上げ現在に至る。趣味は蕎麦打ちと畑仕事。グリーンコープ生協おいた組合員

人とつながることで何とかが生きてきた

寄

村さんが代表を務める歩みの会は、障がいのあるなしにかかわらず共に歩み、さまざまな活動をしている人たちの会だ。任意団体でありながら県内4市に3つの社会福祉法人と企業組合を生み出した。

「明日から35周年の記念旅行でバタバタしています。旅行はこれまでも東京、大阪と3度。重度の障がいを持った人たちが行く旅は大変。助っ人を集める、行った先での応援、費用：誰にどう応援を頼むかが大事です。知りあいのネットワークを頼りに、現地で手を貸してくれそうな人を紹介してもらい、下見方々会いにも行く。「口先で人は動いてくれません。趣旨をていねいに伝えてきちんとお願いします」。抜群の企画力と実行力で仲間の輪が広がる。物心ついてから父親との関係に苦しんだ。生きる意味を求め、手当り次第本を読む少

女時代だったという。中学生の時、母親に二反ほどの畑を任された。土をいじっているのがホッとする。「いわゆるい子でした。自分の希望しない職に就いたのも主体性がなかったからでしょう」と児童相談所に勤めていた若い頃を振り返る。親元から遠く離れひとり生きてみたいという思いは募り続けた。東京の就職口を見つけ勤め先を辞める準備をすすめていた矢先に病

人となりの関係に関心を持ち続け「人は何があれば生きていけるのか」を人生のテーマにしてきた。「人は一人では生きられない。けれど一人になることも必要。ままたらないなあ」と苦笑する。畑仕事と蕎麦打ちが唯一無心になれるひとときだという。

「将来の夢はアパートでひとり暮らし。土いじりができれば幸せ。私つてこれでも結構不良なんですよ」。いぶし銀の生き方がまぶしい。

たりにする。「専門的な立場でのアドバイスでなく、隣人として何かできないだろうか」。そんな思いから「歩みの会」を立ち上げた。「障がいを持つ子どものお母さんたちが安心して話しあいができるよう、子どもの相手をする人も集まってもらいました。思えばそれが歩みの会のはじまりです」。会に集う仲間と共に夢中で駆け抜けてきた35年だった。

2009年度 from ネグロス クリスマスキャンペーン ありがとう

カンパ総額

10,176,707円

(1/20現在)

今年度も11月から12月にかけて取り組んだ「from ネグロス・クリスマスキャンペーン」に組合員から多くのカンパ金が寄せられました。

カンパ金は、APLA／あぷらをとおして、ネグロスをはじめ、アジアの民衆の自立に向けたさまざまな活動の支援に使われます。

Contents

ホームレス問題を考える 11 人と人との絆を再びつなぎたい ―「抱樸館福岡」準備室の取り組み―	2
うちのメーカー・うちの生産者 ㊸ 富国製糖(株) ㊸奄美さびさとう	3
経済効率優先の商品を、生命を育む食べものへ…。 ますます深化するグリーンコープの食べもの運動	4・5
～グリーンコープのこだわり再発見～ 大きく評価されているグリーンコープの びんリユースの取り組み	6
GMナタネ抜き取り隊が始動！	7

料理の本を眺めるのが好きで、これぞと思ったものはいろいろと作ってみるのも楽しい。自分では自覚していないが、どうやらあまり常識的ではない料理もあるらしい。

さまざまなマイブームを経て、今凝っているのは、「かたまり」の調理。魚一匹だったり、肉のブロックだったり、トリー羽だったたり。上手にはできないけれど、捌くのも楽しいし、た



くさんできるので、使い回しもできて、料理をしたという充実感もしっかり味わえる。たくさん人の手を経て大事に育まれた生命をいただき、おいしく食べられる身体があって、そして一緒に味わってくれる人がいる。

グリーンコープがつなぐのは、すぐたくさんのごとなんだと思う。

グリーンコープ生協おきか 理事長
中村 富美子

人と人との絆を再びつなぎたい

「抱樸館福岡」準備室の取り組み

行政に先駆け はじめた支援

2010年5月、福岡市に開設予定の生活困窮者のための自立支援施設「抱樸館福岡」。その準備室スタッフが中心となり、現在福岡市での支援のベース作りと、巡回相談によるホームレス支援活動、開設に向けた準備がすすんでいます。「抱樸館福岡」準備室（以下、準備室）の活動を紹介します。

また、その支援を受け自立した、一人の女性に話を聞きました。

ホームレス問題を考える 11



前列が準備室長の青木康二さん、後列左からスタッフの市丸さやかさん、久保和雄さん、瀬崎篤弘さん



巡回相談のようす

「抱樸館福岡」は、社会福祉法人グリーンコープが100%出資し、NPO法人北九州ホームレス支援機構と共同で運営することになっている施設だ。北九州ホームレス支援機構はホームレスの自立支援において20年の歴史を持ち、北九州市や下関市を中心に幅広く活動している。その実績によりホームレス自立支援センターの委託を北九州市から受けるなど、高く評価されている。福岡での支援はまだ緒に就いたばかり。北九州で支援に携わってきた準備室長の青木さんをはじめ、4人のスタッフが「抱樸館福岡」開設の準備の傍ら、博多区や中央区を中心に市内全域で巡回相談を行っている。

「抱樸館福岡」の開設と同時に福岡での支援もスタートする予定だった。しかし

「抱樸館福岡」の開設と同時に福岡での支援もスタートする予定だった。しかし

トータルにサポートし 人生の伴走者に

北九州ホームレス支援機構の自立支援の大きな特長は、一時的な支援ではなく、自立後のケアまでトータルにサポートし、自立をめざす

す元ホームレス者の人生に寄り添うことだ。もちろん福岡での支援もこの方法を継承する。「ホームレスとは、『ハウスレス』ではなく、人との絆（ホーム）を失った人たちです。その人たちが人間関係を築き、伴走することが大切です。共助と生命を大事にしてこられたグリーンコープだからこそ、私たちは連携できるのです」と青木さん。

準備室はチームワークを大切に4人が連携して支援に当たる。まずはホームレス者との関係をつくるため、巡回し声を繰り返す。こうやって徐々に信頼が生まれる。次に、住む場所、就職へと相談は続く。借金があればグリーンコープの生活再生相談室へ、身体に悪いところがあれば病院へ

一緒に行く。療育手帳の申請も行う。ホームレス者には軽度の知的障がいを持つ人の割合が高く、しかも障がいがあることを誰も認識せず、療育手帳を持たない場合が多いからだ。このようにホームレス者の人生に軸を置いた取り組みは、行政などの支援ではほとんど例がない。

「抱樸館福岡」の挑戦

「抱樸館福岡」は80人が入居できるこれまでにない大施設。相談員は8人。1人の相談員が10人の入所者を担当することになる。シフトを組み、24時間、365日常駐の体制をとる。その中心となるのが、準備室の4人のスタッフだ。しかし、青木さん以外は未経験者。北九州ホームレス支

支援のおかげで、 人とのつながりを取り戻しました

Sさん(55歳 女性)

離婚後7年以上一人で生計を立てていたが、体調を崩し、ずっと疎遠だった熊本の実家へ身を寄せた。42歳の時だった。母親、弟夫婦と生活するようになるが、どうしてもうまくいかず、このままでは精神的におかしくなると思い、実家を飛び出した。それまでは就職先を探すのに苦労したことはなかった。しかし、昨年1月に家を出た時は、折からの不況でまったく仕事が見つからなかった。途方に暮れ、熊本の役所に相談するが相手にしてもらえなかった。相談できるほど親しい友人は誰もいなかった。

昨年7月福岡にやって来たものの、やはり仕事はなく、ネットカフェやファストフード店で夜を明かす。手持ちの金はほとんど減っていき、数日後に公園で夜を明かすようになった。

ある夜、中央区内の公園で寝ていると、若い男に思い切り蹴られ傷を負った。傘でつかれたこともある。女性ならではの誘惑も多かった。逃げるしかなかった。歩き疲れて1000円の中古自転車を買った。いろんな公園を廻った。どこに行けば安全なのか分からず、いつも不安で恐ろしかった。

「私もホームレスになった

援機構で3カ月の研修を積んできた3人にとって巡回相談が実地の研修の場となる。「大事なのは知識ではなく、共感できる心、社会への問題意識、絶対やるぞという意欲」と青木さん。春からは新たにスタッフが4人増える予定で新人教育も忙しくなる。

厨房を預かるのは、グリーンコープのワーカー経験者。食事を作るだけではなく、この取り組みに理解・共感し、入居者が気軽に相談できるような人が青木さんの希望だった。

入居者のケアの中身が抱樸館の要。開所時には北九州からの人的支援を含め、培ってきた経験をすべて投入する。人とのつながりを持ち、いつでも相談できる人がいて、「ホーム」を一

人だから、ホームレスの人に相談する方がいい」。そう思い、空き缶を集めていた老人に声をかけると、意外にみんなとても親切にいろんなことを教えてくれた。炊き出しがあることを知り出かけて行った教会で、巡回相談に来た青木さんに会った。

それまでのつらい話をすると、つい涙がポロポロ…。「青木さんは一人の人間としてプライドを傷つけないよう、やさしく接してください。この人なら、全部預けられると思いました」。いつでも連絡できるようにとテレホンカードを渡された。福岡に来て初めて人とのつながりが持て、それまでの不安が消し飛んだ。

ひと月足らずの野宿生活の後、アパートに入居し、

緒に築きたい。入居者同士の交流を図れるようなプログラムを考えている。また、グリーンコープの組合員はもちろん、地域の人、子どもたち、いろんな人が集えるオープンな場所になることをめざしている。どこで相談していいかわからず困っている人が、気軽に相談に来られる場所にしたい。

「愛されて育った子どもが人を愛するように、助けられた人は、助ける側に回るようになりま。その仕組み作り、きっかけ作りがしたい。バラバラになった人と人との絆を再びつなぎ合う、これは挑戦です」。青木さんの言葉は力強く、そして柔らかだ。

「抱樸館福岡」の息の長い支援の取り組みが、これから続いていく。

生活保護を受けられることになった。初めて自分の部屋に入った時、へなへなと足の力が抜けた。「ここは天国だ」と思った。

今は感謝の気持ちでいっぱい。早く仕事を見つけて、自活できるように頑張って返しがしたいと就職活動に励んでいるが、まだ仕事は見つかっていない。生活保護を受けるのを心苦しく思っている。それでも、週に一度の炊き出しのボランティアや、週に二度青木さんに電話で連絡できることが幸せだと言う。近所には同じ境遇の友人もでき、相談しあい、助けあっている。お兄ちゃん、お姉ちゃんと互いを呼ぶ、まるで家族のようだ。Sさんの人生が、青木さんたちの支援に出会って大きく変わった。

砂糖きびの風味が生きてる、 まろやかな甘味 🍃 奄美きびさとう



島の約3割の砂糖きびが、一本一本手刈りで収穫される



ハーベスターでまたたく間に刈り取る。後部では裁断された砂糖きびがネット詰めされる



ハーベスター収穫の砂糖きびが次々と集荷場に積まれていく



奄美事業所長 勢 幸一さん

専務 松下 豊さん

社長 有村 威生さん

見渡すかぎりの夏植えの砂糖きび畑。

🏠 うちのメーカー

93

奄美市
富国製糖(株)

👨‍🌾 うちの生産者

「🍃奄美きびさとう」はグリーンコープ設立時からグリーンコープブランド商品として、また日々の基礎調味料の一つとして組合員に愛され続けてきた。

メーカーは鹿児島県から350kmほど南、奄美大島にある富国製糖(株)。原料となる砂糖きびは毎年1月から3月末頃まで次々と収穫され、日をおかずに製糖される。2010年の製糖初日の富国製糖を訪ね、社長の有村威生さん、専務の松下豊さん、事業所長勢幸一さんに話を聞いた。

「🍃奄美きびさとう」はグリーンコープブランドだが、グリーンコープ設立前から誕生していた商品だ。

20年前、数千から一万人前後の地域生協がグリーンコープとして結束しようと決め、まず最初に手がけたことはそれぞれが扱っていた商品の統一だった。

砂糖については、ほとんどの地域生協が三温糖を扱っていた。グリーンコープの砂糖としてどんな砂糖がいいのか。当時開発に携わった組合員は砂糖について一から勉強し、「粗糖」という、まったく新しい砂糖に最終たどりついた。甘味だけを追求し精製して作られる上白糖とは対極にあるものだ。黒砂糖ほどアクが強くなく、料理にもお菓子作りにも自在に使える。その上ミネラル分はしっかりと残っている。名前も平仮名で「きびさとう」と付けた。以来組合員は「🍃奄美きびさとう」を大切に扱ってきた。

「キリリ」ではじまる島の一年

砂糖きび栽培は奄美大島の基幹産業。例年正月松の内が終わると、砂糖きびの収穫・製糖の時を迎える。熱帯・亜熱帯性植物の砂糖きびは寒くなると伸長を止め糖分を茎に蓄えはじめる。それが刈り取りのタイミング。再び暖かく

なつて伸びはじめる3月末あたりまで、砂糖きびは順を追って収穫され、製糖工場に運びこまれる。といつてもイネのようにすべて刈り尽くされるということはない。砂糖きびには春植えと夏植えがあり、半年前に植えられた夏植えはまだ腰あたりまでの高さ。このまま畑で1年過ごし、2m50cmまで生長させ翌年刈り取る。

「刈り取り」とは、根元を切り、糖分をほとんど含まない先端部を落とし、節ぶしのハカマを除くまでの作業をいう。かつてはすべて手刈りだったが、近年は約7割が「ハーベスター」という収穫機械に代わり、収穫から茎の裁断までを一気にやってしまう。この場合、先端部や根っこ、はかまなどがどうしても混入する。従って、製糖工程に入る前にそれらを取り除く工程が加わる。ていねいさという点では手刈りとは比べようもないが、砂糖きび農家の高齢化と効率化の前には太刀打ちできないというのが現実だ。

製糖は機械技術と職人技のコラボレーションで

受け入れる製糖工場が19

製糖工程

細断

裁断され製糖工程へ入る砂糖きび。案内は社員の原永智晴さん



搾汁

4基の圧搾機でショ糖液を搾りきる。搾りカスは工場内の自家発電の燃料となる

石灰乳を投入

※沈殿物は堆肥として活用する

煮詰める

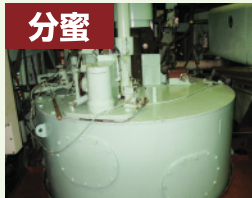
気圧を徐々に下げ沸点を下げ、エネルギーのロスを防ぐ



煎糖



分蜜



糖蜜

※糖汁を何度も分蜜、煎糖した残りを最終糖蜜といい、アルコール、酵母などの発酵原料や飼料として利用される

結晶



62年創業の富国製糖だ。収穫・製糖期間中は24時間体制で稼働する。次々と砂糖きびを満載したトラックが着き、計量、糖度を測るためのサンプリングの抜き取りをした後、きれいに清掃された工場前に積み重ねていく。

製糖は機械化されてはいるが、工程自体はシンプルだ。まず搾汁。約30cmにカットされた砂糖きびをカッターとシュレッダーで切り刻み、圧搾機でショ糖液を絞る。この時のショ糖液は弱酸性であるため、石灰乳を加えて中和し、同時に不純物を沈殿させる。その上澄み液を濃縮工程で煮詰め濃縮シラップを作る。

濃縮シラップから糖分を結晶化させるのが煎糖工程。シラップに結晶の種となる砂糖を入れ、それにショ糖分をからませ水分を蒸発させながら砂糖の結晶を大きくしていく。この工程は砂糖の仕上がりを直接左右する。そのため富国製糖では熟練した職人を「煎糖師」として、独自に抱えている。煎糖師は結晶の出来具合を結晶缶の外から目視で確かめ、また少量を取り出して指先で確かめ、ルーペで確認する。

地域の中で生きる

2010年1月8日、製糖開始の式典が同社玄関前で行われた。出席者は社員・関係者ばかりでなく、地域の首長、砂糖きび農家、マスコミ関係者など多彩な顔ぶれがそろった。砂糖きびの生産・製糖は地域と直結する一大行事なのだ。今期の総原料はまずまずの34,500トンの予定。砂糖きびは自然災害に強い

最終工程が「分蜜」。遠心分離機で、結晶化した砂糖と糖蜜を分離する。ここで取り出された結晶分が「粗糖」(原料糖)だ。富国製糖ではこの粗糖までを作る。粗糖は北九州市に運ばれ、系列の工場で上白糖に精製される。

粗糖とは、結晶のまわりにまだわずかに糖蜜が残っている状態だ。それで砂糖の色が薄茶色に見える。グリーンコープの「🍃奄美きびさとう」はこの粗糖を製品化するため、遠心分離機にかけている時に特別に蒸気を数秒間噴霧し糖蜜をさらに洗い流す。これによって、砂糖が固まるのを防ぐ。あとは乾燥機で乾燥させて「🍃奄美きびさとう」は完成する。

現在国内で消費される砂糖の3分の1は国内産。自給率という点では健闘組だ。だが食料が逼迫すれば、どこの国もまず自国を優先するというのはすでに現実が証明している。「🍃奄美きびさとう」1kgの袋の向うにはさまざまな課題が見え隠れする。

かつて薩摩藩による過酷な支配、そして戦後は一時的にせよアメリカによる統治など歴史の波に翻弄され続けてきた奄美諸島の人たちの結束は固く、その絆が生産基盤を支えている。製糖が無事終了し、一段落ついた6月頃、富国製糖の役員は660戸の全砂糖きび農家を一軒一軒訪ね、その労をねぎらう。それが毎年の慣わしとなっている。社長の「共存共栄」の世界観を実践する。

作物で、台風で他の作物が全滅しても7〜8割は生き残る。干ばつにも耐える。しかしそれにも限界はある。年毎に異なるリスクをどう軽減するか、砂糖きび生産農家、製糖会社という関係を越え、これまで地域ぐるみで対策を練ってきた。

かつて薩摩藩による過酷な支配、そして戦後は一時的にせよアメリカによる統治など歴史の波に翻弄され続けてきた奄美諸島の人たちの結束は固く、その絆が生産基盤を支えている。製糖が無事終了し、一段落ついた6月頃、富国製糖の役員は660戸の全砂糖きび農家を一軒一軒訪ね、その労をねぎらう。それが毎年の慣わしとなっている。社長の「共存共栄」の世界観を実践する。

育む食べものへ…。 ユープの食べもの運動

グリーンコープは設立以降、一貫して食べものの「安心・安全」を追求してきました。それと同時に、そうした食べものを維持していくために欠かせない「平和な社会」「豊かな自然環境」「南の国々の民衆との連帯」など、さまざまな運動にも取り組んできました。また、衰退していく日本の農業や漁業を応援することにも精力的に取り組んでいます。

そうした運動の継続によって、グリーンコープは「経済効率優先の商品を、生命を育む食べものへと戻す」運動をすすめてきました。

今号では、深化してきたグリーンコープの食べもの運動を紐解き、改めて確認することになります。

「安心・安全」な 食べものを求めて グリーンコープを創った

グリーンコープの前身生協のほとんどが、戦後の高度経済成長による「大量生産」「大量消費」「大量廃棄」によって引き起こされた食品公害や環境汚染から身を守るために、1970年代に立ち上がりました。その後日本社会は、さらなる合理化や効率化へ向かい、結果、生命の源である食べものの安全性は揺らぎ、人間同士の絆は断たれ、地域も崩壊していききました。そのような事態に危機感を募らせたのがグリーンコープの前身生協でした。それらの生協はそれぞれ、福岡圏内を拠点とする「ちくれん」と熊本市と北九州圏内で展開する「共生社」に属しており、2者が団結することによって大切なものを守っていくことにしました。それが1988年グリーンコープ連合誕生につながりました。



グリーンコープが未来に守り継いでいきたいものを守る。このように、グリーンコープが生産者やメーカーとの信頼と連携に基づいて作る「安心・安全」を見える形として確立したのが、「グリーンコープ商品生産・製造認証システム」です。商品の製造工程はもちろん、1次原料から微量しか使っていない3次原料まで確実に追跡できる優れたシステムだと言えます。これによって、これまでも社会的に

確かな安心と安全を 確認できるシステム

グリーンコープで扱っているものは、安価に、大量に生産されるような無機質な商品ではありません。「生命を育む」ものとして位置付け、組合員にとってはそれを作ってくれる人の顔が、生産者やメーカーにとつては食べる人の顔が、お互いに見える関係を大切にしてきました。

このように、グリーンコープが生産者やメーカーとの信頼と連携に基づいて作る「安心・安全」を見える形として確立したのが、「グリーンコープ商品生産・製造認証システム」です。商品の製造工程はもちろん、1次原料から微量しか使っていない3次原料まで確実に追跡できる優れたシステムだと言えます。これによって、これまでも社会的に



という母親の素朴な思いが込められています。そのために、原料・素材の一つひとつにまでこだわってきました。必要のない食品添加物は使わない「手作りを大切に」する「産直、国産農産物にこだわる」「生命と最も近い第一次産業を応援する」「遺伝子組み換えでない作物（原料）を追求する」「環境ホルモン物質は避ける」など。そのためにかかる労力は惜しみません。そして、「昨日より今日、今日より明日、そして未来」へ向かうグリーンコープの食べもの運動から多くの商品が生み出されています。

例えば、食品添加物を使うかどうかについて、状況に照らしあわせながら、ていねいに組合員による検討を深めて結論を出します。その判断に間違いがあったとしても、そのことを真摯に受け止めた上で組合員や社会に向け、積極的に情報公開をするようにしています。

けてもらうために 生産奨励金贈呈

2009年
11月26・27日

トマトケチャップやトマトジュースの原料である加工用トマトはほとんどが輸入物で、国産トマトは減少し続けていました。そのような中で、グリーンコープは2006年から国産の加工用トマトを食べ続けるための取り組みを続けています。真夏の炎天下、腰をかがめての収穫作業は高齢の生産者にとって非常に過酷なものです。高齢化や後継者不足という悪条件の中、生産者に少しでも安心して農業を続けてもらうために、トマト加工製品の価格に生産奨励金を付加して「生産奨励金」として毎年生産者に届けています。

2009年度も組合員の代表が産地へ生産奨励金を届けました。長野の贈呈式のような報告します。

生産奨励金の贈呈（JAあづみ）

生産者の青柳さんは「生産奨励金



北海道JAあづみのおおいた理事長奥田富美子さん、かごしま理事長川原ひろみさん、くまもと副理事長佐枝尚美さん(写真右)が奨励金を届けました

消費者行動にあることも忘れてはなりません。今、市場では価格破壊がすすみ、適正価格が揺らいでいます。このような価格では、生産者は農業を続けていけるはずはありません。

そのような中、グリーンコープは「日本の農業を守る」ことに力を傾注してきました。自然の中で営々と育まれてきた農業は、生命と直結している生業そのものです。生産者が再生産できる価格で取り引きすること、グリーンコープの産直生産者は農業を継続することができています。そして、生産者と共に日本の農業を守るという強い意志を持つて取り組んでいます。

生命に寄り添って つながりあう未来をつくる

原油や穀物などの高騰で世界的な食料危機に陥った2008年、そして、リーマンショックに端を発した経済危機が世界中を覆った2009年。厳しい世界情勢の中にあっても、グリーンコープがめざすのは、み

んなで助けあって、安定した「食の安心・安全」を守り抜くことだと考えます。そのために、グリーンコープは、農業や酪農などを継続して生産してもらうために、生産奨励金制度を設け、グリーンコープから直接生産者に届けています。その生産奨励金は商品価格の中に含まれており、私たち組合員の利用によって支えられています。その結果、びん牛乳の生乳生産者やジュース用トマト生産者、産直赤とんぼ米の生産者、落花生の生産者は、継続的な農畜産業を営むことができています。

生命を育む食べもの運動は、今、人と人の生命が響きあう関係づくり、絆がくり出す地域の再生へ向けて舵を取りました。社会の底辺で苦しむホームレス者への支援や、世界経済の不況の風に打ちのめされながら生きている「南の国々の民衆」との互恵的な連帯へと歩をすすめました。

経済効率優先の商品を、生命を ますます深化するグリーン:

第6回酪農生産者交流会 2009年11月30日



ずっと飲み続けたいから…
non-GMO生乳生産者を応援しよう

第6回の酪農生産者交流会がびん牛乳の生乳の産地である熊本県菊池市で行われ、27人の生産者と10単協から20人の組合員が集いました。生産奨励金の贈呈や、恒例の「タオルを贈る取り組み」が行われ、組合員と生乳生産者が和やかに交流しました。

生産者の励みになっている
生産奨励金

グリーンコープは、びん牛乳の生乳生産者が今後酪農が続けられるようにと、2008年から生産奨励金を生産者に届けています。これはびん牛乳の価格に上乘せする形で、組合員から集められたものです。第6回となる今回は1656万円が生産者に贈られました。景気の低迷で酪農家も厳しい経済状態が続いています。生産奨励金が生産者の励みとなり、安心・安全でおいしい牛乳を届け続けてくれることにつながります。



組合員を代表してさがの多伊良理津子さん(左)からタオルの目録を贈呈した

組合員の思いを込めて
タオルを贈る

タオルは牛が乳房炎にならないよう乳房を清潔に保つためのもの、毎年組合員に募って集められたタオルを生産者に届けています。今年も生乳生産者を応援するため、組合員の思いの込められた3万2051枚のタオルが、メッセージと共に生産者に贈られました。また、タオルを洗うためのせっけんも贈呈されました。

びん牛乳のよさを伝える

グリーンコープ共同体商品おすすめ委員会から20



共同商品おすすめ委員会長 藤みさきさんから、びん牛乳利用普及の取り組みを報告



信頼されてきたグリーンコープの商品の確かさがより一層評価されることになりました。グリーンコープのこのような姿勢は、生産者やメーカーの共感を呼び、共に生命を守ることにこだわるパートナーとして存在してくれるようになりました。

信頼されてきたグリーンコープの商品の確かさがより一層評価されることになりました。グリーンコープのこのような姿勢は、生産者やメーカーの共感を呼び、共に生命を守ることにこだわるパートナーとして存在してくれるようになりました。

ジュース用(加工用)トマトの生産を続



産地ごとの栽培面積と生産奨励金					
産地名	09年面積(a)	08年面積(a)	前年比(%)	1反(10a)当たりの生産奨励金	生産奨励金(円)
JAながの	1,526.7	1,631.3	93.6	-	3,069,600
JAグリーン長野	398.2	328.5	121.2	-	995,500
JAあづみ	1,568.0	1,527.0	102.7	25,000	3,667,150
JA中野市	53.1	58.1	91.4	20,000	106,200
計	3,546.0	3,582.2	99.0	20,000	7,838,450
JAあづみの計	422.0	386.5	109.2	25,000	1,055,000

2009年度の作付面積や生産量は、全体的には縮小傾向が続いています。今回の贈呈式では、このような状況を少しでも食い止め、国産加工用トマトを守っていくため、今後も交流を続けていくことを確認しました。

さがの福嶋副理事長は、「この生産奨励金は安心・安全な加工用トマトで作られたおいしい商品をつまんでも食べ続けたい、そして日本の農業を守りたいという願いがカタチになったものです。これからも私たちは商品を利用することでずっと応援しています」と挨拶し、ふくおかの武岡副理事長が目録とグリーンコープのトマトケチャップ、トマトジュースを手渡しました。

JAあづみの手塚常務理事は「生産は何よりの励みになります。今年は7月の長雨をはじめ、天候に泣かされた1年でしたが、メンバーが4人増え、来年は収量アップをめざします」。生産アドバイザーの鹿川さんは「今年の天候不順では温暖化の影響を初めて感じました。これからは生産者がグループを作って支えあう必要があり、前向きな決意を語りました。今年はこれまで経験したことのないほどの天候不順に見舞われ、多くの生産者が自然を相手の農業の大変さを改めて感じたといえます。」

08年度委員会で作成したリーフレット「ごつくんおいしいびん牛乳」の活用についての報告がありました。また単協からは、各単協で



工夫を凝らした各単協組合員からのメッセージ

取り組まれた生産者を迎えるための交流会のようすを報告しました。組合員は生産者と直接会って交流することとびん牛乳の素晴らしさや顔の見える産直の関係を実感することができたということです。また、さがからは「組合員のびん牛乳を思

う気持ちを何とか伝えたいと、びん牛乳の絵画と書道のコンクールを行いました。おおいからは「生産者の方との交流会では遺伝子組み換え問題を学習しました。non-GM飼料を使っているびん牛乳の良さを伝えていきたい」など、単協の取り組み報告がありました。生産者を代表して森由美さんが、「10年ほど前に組合員になり、びん牛乳がとても大事に取り扱われていることを知って感激しました。昨年の飼料高騰の際には生産奨励金をいただけて救われました。タオルも最後まで大事に使わせていただいています」と話しました。他の女性生産者からは「毎日朝早く起きて乳を絞って出荷している。予約の取り組みなどで安定して飲

女性生産者との交流会

午後からは女性の生産者たちと組合員とが交流会を行いました。まずはびん牛乳で乾杯。和やかに昼食を囲みながら、女性同士、話に花を咲かせました。生産者からは「組合員がとても頑張っていることに励まされている」「組合員からは「子どもが大好きでいつもびん牛乳を飲んでる」「利用普及の取り組みに単協をあげて頑張っている」など、熱い思いを伝えあいました。交流会でお互いに理解しあい、いっそう産直の関係を深めることができました。



11月21・22日の環境フェアでは、びん牛乳等の試飲をしてもらいながら、びんリユースをアピール

環境省九州地方環境事務所及び経済産業省九州経済産業局の主催で九州地域における焼酎リユースびん普及のためのシンポジウムが開催され、一般及びグリーンコープの組合員などが参加しました。報告者の一人としてグリーンコープかごしま生協の「いのちとくらしの委員会」委員長 堀切順子さんが、グリーンコープのびんリユースの取り組みを紹介しました。また、翌日の環境フェアには、グリーンコープのブースが設置され、びん牛乳の試飲などをおして、びんリユースをアピールしました。

焼酎リユースびん推進シンポジウム
かごしま環境・新エネルギーフェア
かごしま県民交流センター
2009年11月20・21・22日



びんリユース

大きく評価されている グリーンコープの びんリユースの取り組み

シンポジウムの開催に当たって、環境省九州地方環境事務所所長 神田修二さんから、「現在、環境省では、循環型社会形成・低炭素社会推進を図ることを積極的におすすめしている。その一つとして、九州地方でのリユースびんの普及拡大についての事業を開始したいと考えている。中でも、鹿児島県の伝統的な特産である焼酎容器をリユースびんにすることで、焼酎文化を生かしながら循環型社会を推進する取り組みモデルにできるのではないかと期待している」と挨拶があった。

安井至さん（東京大学名誉教授）からは、次のような主旨の講演があった。「数年前から、循環型社会の推進は国の方針として定められ、リデュース（減量する）↓リユース（再使用する）↓リサイクル（再生利用する）」という順番が良いと

なっている。しかし、これまで強調されてきたのは、『リサイクル』。廃棄物行政の一部として、最終処分量の減量が中心の課題であった。現在は、政府の温室効果ガス25%削減という方針の下で廃棄物政策の転換期と言える。そのような中でびんのリユースは、環境負荷が低く有効な方法だ。取り組みに際しては、輸送にかかるエネルギー消費や経費軽減のため、できるだけローカルなシステムを作っ

て狭い範囲で行うのが理想的だという調査結果が出ている」。

グリーンコープの4R運動の取り組み報告

主催した環境事務所からきちんとびんリユースに取り組んでいるグリーンコープへ参加の要請があり、地元かごしまの堀切いのちとくらしの委員会委員長がスライドを使って報告した。

取り組みの経緯

一般的には3R運動と言われているが、グリーンコープのリユース・リサイクル活動は、リデュース（断る）を加えて「4R運動」として取り組んできた。びんリユースの仕組みが整ったのは、1996年。

びんリユースの社会的認知の必要

シンポジウムでの課題がパネルディスカッションで意見交換されました。コーディネーターは原口泉さん（鹿児島大学法文学部教授）、パネラーは安井さん、堀切さん、清水建司さん（鹿児島県地球温暖化防止活動推進センター長）、永見靖さん（環境省リサイクル推進室室長補佐）。

安井至さん

リユースは回収率が勝負。グリーンコープの回収率は例外的。回収率の低い生協のようすを見ると、周知の徹底、教育ができていない。デポジットはよさそうだが、実際取り組んでみるとあまり効果がないのが実態。まずは、容器としてのびんがもつと見直される必要がある。

堀切順子さん

1960年代、大量生産・大量消費・大量廃棄、公害問題などが山積していた。1988年のグリーンコープ設立以前の前身生協時代から、組合員である母親たちは、子どもを安心して育てるために、環境問題に大きな関心を持ち取り組みを行ってきた。せっけんを使うこともその一つ。それが、リユースやリサイクル

清水建司さん

環境問題に関心の高いグループでもリユースびんに関する認識は1・2割程度というのが実態。学校でアルミ缶の回収があるので、お父さんのびんビールを缶に替えてほしいと子どもが言ったという話もある。学校教育なども含め、学習やアピールが必要。

原口泉さん

鹿児島市内の飲食店での焼酎びんなどのリユースは、居酒屋のチェーン店などの事例から見ても有効なようだ。グリーンコープの報告から鑑みても、リユースを広げていくためには、何より家庭から返すシステム作りが大切であることが分かる。今日のシンポジウムを契機にリユースびんに関する認識が広がることを期待したい。

それまでバラバラだった調味料などのびん容器を6種類の規格に統一し、メーカーの協力も得て、再使用する仕組みを作った。平均回収率は約75%。2003年には環境負荷が少ない「びん」を使用したびん牛乳を開発。牛乳びんのリユースがスタートした。

1998年から「トレートレ」の取り組みも



堀切さん

2004〜2008年まで、グリーンコープの牛乳びんの回収率は、平均約98・8%と高い。その容器の超軽量びんをコーディネート

グすることによって強度を維持し、30回以上繰り返し再使用できる設計になっていることだ。CO₂を12%削減する効果がある。もし、リユースびんではなく、使い捨てのワンウェイびんを使っていたとすれば、この5年間で7310万本が廃棄またはカレットとしてリサイクルされる計算になる。この分の環境負荷の軽減に貢献したことにもなる。

大切な組合員の協力

こうしたリユースびんの高い回収率は、組合員の協力があってこそできることだ。「牛乳びんは、さっとすすいでキャップを付けて返す」「調味料などのリユースびんは洗ってキャップを外して、どうしても取れ

なければキャップを付けたまま返す」など、びん種によって違う返却方法をいねいに案内している。こうしたことを、新しい組合員の理解や組合員全体に周知してもらうために、情宣用のパンフレットの配布や学習会、各種の組合員対象の取り組みなどでのアピールを行っている。特に牛乳びんをリユースする際の問題点として、びんに印をつけるなど、してはいけないこともきちんと知らせている。

このような日常の取り組みの積み重ねによって、グリーンコープの4R運動が、つくりあげられている。

※醤油・酢などの900mlびん・めんつゆなどの500mlびん・ケチャップなどの350mlびん・ドレッシングなどの200mlびん・ぼん酢などの360mlびん・ジャムなどの200mlびん



▲抜き取り隊が行動開始。1392本の自生ナタネを採集した

▶簡易検査でラウンドアップ、バスタの両方に陽性反応が出たものもあった



▲組合員も検査に参加し、自生ナタネのGM汚染の広がりを確認した

▶根が張って抜きにくいナタネも



GMナタネ抜き取り隊始動！

グリーンコープは、遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーンの呼びかけに連帯し、遺伝子組み換え（GM）反対運動に取り組んできました。

その一つ、自生GMナタネ汚染調査活動をはじめから5年。グリーンコープ生協ふくおかの調査箇所である福岡市博多港周辺では毎年GMの陽性反応が出ており、汚染の広がりが懸念されています。自生GMナタネの広がりを少しでも防ごうと、ふくおかでは直接抜き取っていく取り組みがはじまりました。

2009年11月21日に行われた第1回GMナタネ抜き取り隊の活動のようすを報告します。

日 本では食用油の原料となる輸入ナタネのほとんどがGMナタネ。それが輸送中にこぼれ落ちて自生し、汚染が広がっていることが分かった。さらにこの自生GMナタネが越冬し、本来一年草のはずのナタネが多年草化している実態が各地で観察されている。しかも、5～6年以上も発芽能力があるとされている。このままにしておくとGM汚染が広がり、ナタネの近隣種であるチンゲンサイやブロッコリーなどと交雑する可能性もある。

多重耐性ナタネを発見

2004年、茨城県鹿島港周辺でGMナタネが自生しているという農林水産省の発表を受け、「遺伝子組み換えを考える中部の会」（以下、中部の会）は三重県

四日市市や名古屋港での自生GMナタネ調査をしてきた。2005年には遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーンの呼びかけで全国的に調査活動がはじまった。グリーンコープでも調査活動を行った結果、福岡県博多港周辺でも自生しているGMナタネが見つかった。その年、国内農業や環境への影響を避けるために、このままにはできないと千葉

港周辺で市民グループが自生GMナタネ抜き取りを開始した。2006年には中部の会でも大規模に抜き取り調査をはじめた。千葉港では除草剤のラウンドアップと、バスタの両方の耐性を持つ多重耐性ナタネが発見されている。これは政府がGMナタネの輸入を認可した時点では予想されていなかったことである。

ふくおかでの取り組み

このような状況にグリーンコープ生協ふくおかは危機感を持ち、抜き取り隊を立ち上げることにした。これまで2009年8月29日にGMナタネ抜き取

り隊立ち上げ準備会、10月14日GMナタネ抜き取り隊立ち上げ集会を開催。遺伝子組み換え作物そのものや、生物多様性を損うなどの問題点について学習し、GMナタネ抜き取り隊の目的について共有化しながら取り組みを準備してきた。そして11月21日、第1回GMナタネ抜き取り隊が起動することになった。

当日は、組合員、グリーンクラブ（グリーンコープ納入業者の会）や青果生産者の会、ふくおかネットワーク、地域の市民グループなど約90人が参加。班に分かれて箱崎埠頭で自生ナタネを採取。先回の立ち上げ集会所に抜き取った同じ場所でも見つかったり、根が張って抜きにくくなっているものもあった。採取したナタネは持ち寄って簡易検査キットで調べ、その結果39検体中34検体に陽性反応があった。ラウンドアップとバスタ両方に反応があったものが8検体あり、汚染の実態が深刻になつてきていることを確認した。参加者からは「遺伝子組み換え作物には関心があつた。放つておけないことだと思ふ。今回のような具体的な取り組みに参加できて問題がより身近になった」「埠頭のこんな場所になぜ遺伝子組み換えされたナタネが生えているのかと思つたが、輸入されたナタネが原因と知つて問題の重大さが実感できた」と感想が出された。次回も、春の自生GMナタネ汚染調査と同時に取り組み予定にしている。

このような活動は継続することに意味がある。ふくおかでは地域にGMナタネ

自生が拡大しているという現実を受け止め、多くの組合員と問題意識を共有しながら、地道な活動を重ねている。

2010年 シャボン玉月間ポスター（募集要項）

募集

でき上がり寸法：B3（横36cm 縦51cm）
色など：カラー（紙、データ（PDF添付））
必ず入れる文字：（2010年キャッチコピー）
「“せっけんっていいな” 地球のキモチ」

内容：「石けんを使う暮らしの提案」、
「水環境保全についての提案」など
※住所、氏名、電話番号、所属生協名を明記する
締切り：2010年3月15日必着（メールまたは郵送で）
採用作品決定：2010年3月17日
賞金：3万円（採用作品のみ）

（作品の送り先・問い合わせ先）
〒336-0021 さいたま市南区別所5-1-11 生活クラブ生協（埼玉）本部内 協同組合石けん運動連絡・事務局
TEL・FAX 048-863-7896 E-mail kyosekiren@opal.ocn.ne.jp



No.19

玄海原発で日本初のプルサーマル操業

2009年11月から佐賀県の玄海原発で、日本初のプルサーマルによる送電がはじまりました。「核燃料のリサイクル」と宣伝され、いかにも環境重視の姿勢であるように言われています。しかし、核燃料リサイクルは技術の問題やコストの面にしても難しいと指摘されています。私たちが納得できる情報をきちんと開示すべきです。通常原発でさえ、使用済み核燃料は「安全な処理方法として地中深くへの地層処分をする」とも言われています。安全と言うのは本当でしょうか？無毒化する技術もないのに大量の使用済み核燃料を生み出してしまったので「地盤に埋めている」だけなのです。プルサーマルについては、その処理はもっとやっかいで、MOX燃料を使った後の使用済み核燃料の処理法については何も決まっていません。数万年とも言われる管理が必要で、大きな負の遺産を子孫に負わせることになるのです。プルサーマルの運転を停止し、みんなで原発に頼らない暮らしをつくっていくことが大切です。

グリーンコープ共同体組織委員会

投稿募集中

私の好きなグリーンコープ商品

- 400字程度 ●毎月月末
- 住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード（500円分）進呈。
- 住所・氏名などの組合員の個人情報、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561
福岡市博多区博多駅中央街8-36 博多ビル7F
グリーンコープコミュニケーション
ワーカーズ連（REN）
「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-481-7876
Eメールアドレス
rikoho@greencoop.or.jp

2006年6月、地方紙の投書欄に設けられたテーマ「朝ごはん」に、思いつく

グリーンコープ生協ふくおか

津口 八重子

私の好きなグリーンコープ商品

おいしい・たい

投稿欄



日本人であるなら、ましてや味噌汁が好物となれば「せめて味噌は自分の手でつくらなければ」という私の思いは、1991年6月に成就した。近くのグリーンコープ高雄店で開催された「店舗まつり」の一環として「味噌づくり講習会」が行われ、店舗委員の一人として携わった。それ以来味噌をつくり続けて18年。味噌の甘さが際立つ手づくり味噌は懐かしい味として、あの方の方が待っていてくださる。2006年6月、地方紙の投書欄に設けられたテーマ「朝ごはん」に、思いつく

グリーンコープ生協ふくおか

津口 八重子

いま地域を考える

No.198



犬塚さん（前列左）、瀬川さん（後列右）とポニーランドのメンバー



ほだ木から次々に生いいたけが収穫できる



卵を産む鶏を150羽飼っている

犬塚さんと馬との出会いは10年位前。一人娘の高校への不登校がきっかけで馬を飼ったことにはじまる。「馬と一緒にいると娘が精神的に落ち着いてきましたね。その効果に感激しました」と、犬塚さんは当時を振り返りながら話す。その頃知りあった同様の悩みを持つ子どもたちも馬に関心をもち、次第に引き寄せられるように集まってきた。私財を投じて山を購入、少しずつ、馬を増やしていった。3年前、定年退職してからは活動を本格化。社会的に認知され、経営的助成も受けられるように、小規模作業所を立ち上げ、NPO法人として長崎県の認定を受けた。ポニーランドには心の悩みを持ち、癒しを求めている人もいます。馬に触れる

ことで、精神的に安定し、うつ状態が改善、元気になる人も多いという。地域の小学校や幼稚園の乗馬体験研修の申し込みもある。また、乗馬体験を求めて佐世保市や大村市からの来訪者もあり、日曜日には一人500円で一般に開放している。スタッフの瀬川さんはもともと馬が好きでポニーランドにかかわるようになった。地域の神社で行われる「やぶさめ」に挑戦するために練習をしている。

自然の中でできる事業に挑戦

ポニーランドでは乗馬だけでなく、原木しいたけ栽培、平飼いの養鶏、堆肥を活用して野菜づくりに取り組んでいる。卵やしいたけは県道沿いの自動販売機で販売している。グリーンコープの福祉活動組合員基金から受けた助成金を、2008年には生しいたけのほだ木、2009年にはミ

動物との触れあいによるリハビリテーションは、動物介在療法（アニマルセラピー）としての効果が認められるなど注目されている。特に馬による乗馬療法（ホースセラピー）は、欧米では、その起源がギリシャ・ローマの時代まで遡る。1875年頃には神経障がい治療への有効性が認められ

毎週水曜日、市内の知的障がい者福祉施設「青空会」から18人のメンバーが馬に乗り、やってくる。馬の手綱を引いてゆっくり歩くのが、ポニーランドのメンバーの仕事だ。一人5〜6分くらいずつ、のんびり林を散策する。青空会とは乗馬を通じた知的障がい者のリハビリをするなど、同じ障がい者福祉施設として連携して8年

になる。イベントと一緒に開催したり、施設の備品を融通しあうネットワーク関係も作っている。青空会のメンバーは、「止まっている馬にまたがるだけ」からはじめて、慣れながら馬に少しずつ乗れるようになっていった。決して無理強いはない。馬の感触や体温を感じ、ゆっくりと馬と呼吸をかわせていく。丸馬場を回って林の中に馬が歩みをすすめていくと緊張気味の

馬に癒されて元気になる

犬塚さんと馬との出会いは10年位前。一人娘の高校への不登校がきっかけで馬を飼ったことにはじまる。「馬と一緒にいると娘が精神的に落ち着いてきましたね。その効果に感激しました」と、犬塚さんは当時を振り返りながら話す。その頃知りあった同様の悩みを持つ子どもたちも馬に関心をもち、次第に引き寄せられるように集まってきた。私財を投じて山を購入、少しずつ、馬を増やしていった。3年前、定年退職してからは活動を本格化。社会的に認知され、経営的助成も受けられるように、小規模作業所を立ち上げ、NPO法人として長崎県の認定を受けた。ポニーランドには心の悩みを持ち、癒しを求めている人もいます。馬に触れる

ことで、精神的に安定し、うつ状態が改善、元気になる人も多いという。地域の小学校や幼稚園の乗馬体験研修の申し込みもある。また、乗馬体験を求めて佐世保市や大村市からの来訪者もあり、日曜日には一人500円で一般に開放している。スタッフの瀬川さんはもともと馬が好きでポニーランドにかかわるようになった。地域の神社で行われる「やぶさめ」に挑戦するために練習をしている。

「馬や自然に出会って癒されていく人たちを見ると自分もうれしい」と犬塚さん。しかし、問題は厳しい経営状況だ。「グリーンコープをはじめ、いろいろなところから支援を受けていますが、経営は厳しいです。利用者には喜んでもらっているし、ずっと続けていくために、もっと国の支援などがあるといいですけどね」と話しながらも、子どもたちと馬に囲まれた毎日に犬塚さん自身も心が和む。ポニーランドの歩みは地域の中に溶け込みながら、静かに続いていく。

NPO法人
ポニーランド長崎

長崎市東方、西山水源地の近く、西山木場の自然豊かな山中にNPO法人ポニーランド長崎（以下ポニーランド）という知的障がい者小規模作業所がある。乗馬や自然体験で癒しを提供し、障がい者の自立支援や生活応援のために活動している。代表の犬塚博二さん（グリーンコープ生協（長崎）組合員）とスタッフの瀬川真由美さんに話を聞いた。

馬に癒されながら
歩んでいく

ポニーランドは、犬塚さんとスタッフの瀬川さんが中心になって運営し、養護学校を卒業した8人のメンバーが毎日9時から4時まで活動している。「馬と一緒にいると誰でもいい気持ちになって落ち着くでしょ。それを味わってもらっているだけです」と代表の犬塚さんは淡々と話す。

ており、現在、その治療システムも確立している。日本では、まだ医療としては一般的とまでは言えないが、動物との触れあいとおして情緒的な安定や癒しを得られるとして、期待を集めている。

馬に乗って林の中へ

障がい者福祉施設「青空会」から18人のメンバーが馬に乗り、やってくる。馬の手綱を引いてゆっくり歩くのが、ポニーランドのメンバーの仕事だ。一人5〜6分くらいずつ、のんびり林を散策する。青空会とは乗馬を通じた知的障がい者のリハビリをするなど、同じ障がい者福祉施設として連携して8年



林の中を馬に乗って歩くのは楽しい。ポニーランドのメンバーが馬をひいていくとみんなの心が安らいでいく

2009年12月の組合員数 415623人 (12/25現在)

リユース リサイクル データ 2009年11月分

牛乳びん	リユースびん	トレー	モールドバック
回収本数 842,733本 回収率 98.8% (10月18日～11月14日回収分)	回収本数 153,241本 回収率 51.8%	回収重量 13,184kg 回収率 56.0%	回収重量 36,730kg 回収率 112.1%

放射能汚染測定結果報告(195)
2009年11月

放射能汚染食品測定室検査。
NDは、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。
※は、グリーンコープ連合取り扱い商品です。

	検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計 ベクレル/kg
※	カシューナッツ	インド	ND	ND	ND
※	昆布	北海道	ND	ND	ND
※	アーモンドチョコボール	アメリカ(アーモンド)	ND	ND	ND
※	わかめ	長崎県	ND	ND	ND
※	わかめ	宮城県	ND	ND	ND
※	かつお	太平洋	ND	ND	ND
※	もずく	沖縄県	ND	ND	ND